

夏どりイチゴの産地育成

要約

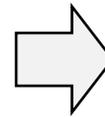
管内大部分を占める山間部は農業には不利であるが、夏季冷涼な標高の高い山間地の気候を活かした新たな産地の育成が望まれていることから、夏季にも収穫出来るイチゴの試験栽培に取り組み、夏秋どりを目的としたイチゴの新たな産地化をめざした。

H29年度から天川村役場及び同村生産者と連携を図りながら試験栽培を行っている。

今年度は栽培面積を拡大し、6品種の中から栽培に適した品種の絞り込みを行った。4月下旬に定植を行い、6月中旬から8月上旬までの記録的な猛暑にも関わらず、生育は順調にすすみ6月末から12月中旬まで収穫を行うことが出来た。

現状（背景）と課題

- ・ 県内実需者からは県産イチゴの周年供給が求められている。
- ・ 夏季冷涼な標高の高い山間地の気候を活かした新たな産地の育成が望まれている。
- ・ 夏どりイチゴの出荷を目的とした栽培は県内での事例がない。
- ・ H29年度の試験栽培では1.3 t / 10 a と収量が少ない。



目標

- ・ 栽培に適した品種の絞り込み3品種。
- ・ 収穫量の増加1.6 t / 10 a。

活動内容

- ・ 栽培適性を調査するための展示圃の設置（200m²）
- ・ 安定して栽培するための栽培指導
- ・ 生産者と実需者を交えた試食会の開催による販路の開拓

成果

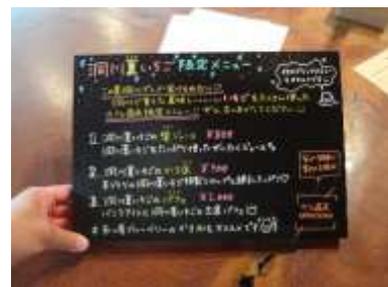
- ・ 試食会を通じて生産者と実需者のマッチングが行えた。
- ・ 村内の旅館及びカフェで夏どりイチゴを使用したスイーツが提供された。
- ・ 実需者が求める品種を2品種に絞り込んだ。
- ・ 1.7 t / 10 a の収穫量を得られた。



栽培圃場



7月の株の様子



村内カフェでの利用



天敵の利用した害虫防除



実需者を交えた試食会の様子



品種選定の会議

普及活動のポイント

- 夏どりイチゴの栽培に関する技術を有していなかったため、毎週圃場に通い変化がないかを確認し、その都度栽培方法の指導を行った。
- 試験研究機関と圃場の様子や収穫量の結果などを情報共有し、栽培の方法を協議した。
- 夏どりイチゴに興味を示す実需者に対して試食を行い、生産者とのマッチングを行った。
- 先進地事例調査で収集した情報を栽培指導に取り入れた。

対象の変化

- H29年度の30㎡から200㎡に栽培面積が増えたことで、生産者が栽培のみならず販売先の選定や販売の方法にも責任感を持つようになった。
- 普及が生育調査や生育に応じた栽培指導を実施することで、役場や生産者の信頼が高まった。
- 栽培が順調に進んだことで、県内外の実需者から夏どりイチゴの取引を行いたい申出があり、生産者の栽培意欲が向上した。

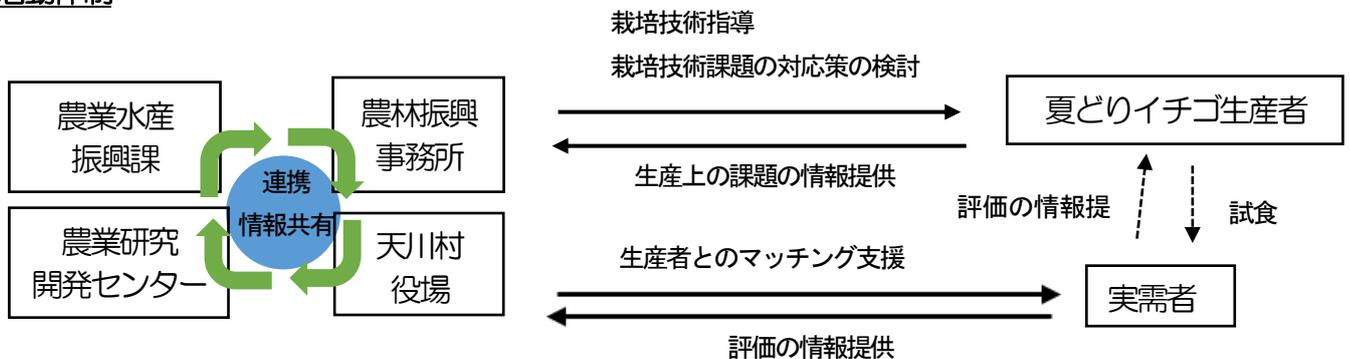
対象者からのコメント

- 2年目の栽培で栽培技術に不安があったが、定期的な生育調査や生育に応じた栽培指導を行ってもらったことで不安が解消された。(生産者)
- 天川村の新たな特産品として育てていきたい。(役場担当者)

これからの活動ビジョン

- 先進地事例調査で収集した栽培方法の検証を行い、安定した生産を行う。
- 販売の支援として引き続き、生産者と実需者のマッチングを図る。
- 新たな担い手の確保に向けて役場と連携を行う。

活動体制



用語解説

夏どりイチゴ
冬から春にかけて収穫されるイチゴとは異なり、夏から秋にかけて収穫されるイチゴのこと。
温度や日の長さなど一定の条件がそろえば、連続して花を咲かせる四季なり性の品種が多く使用されている。
平均温度が20～25度の場所を好むため、安定して夏季に収穫出来る場所は北海道や東北地方、その他標高の高い地域に限られる。

南部農林振興事務所農業普及課
担当：農産物ブランド推進係 梨原
担い手・農地マネジメント係 長城
新品種・新技術の確立支援事業